



## 次回例会のご案内

是非ご出席ください！ 課題を共有しませんか？

日時 ▶ 4月20日(火) 午後7時~9時

会場 ▶ 愛宕町教会

奨励 ▶ 松木田 博 牧師 (日本基督教団 甲府教会)

発題 ▶ 「YMCAでの30年の歩みを振り返って」  
大和田浩二氏 (山梨 YMCA 青少年センター総主事、甲府教会員)

### 本会の趣旨は

今、山梨県下のキリスト教関係学校、施設等が一堂に会して互いの情報を交換する場がありません。このことは、各団体等が今の時代の中で孤独に自らの使命を果たすことになり、孤立感が大きいといえます。

改めて、県下のキリスト教諸団体が集まり、情報の交換と結びつきを強めていく場を持つことで、互いに愛し合い、支えあい、仕え合うことができたと願っています。互いに会し、自らの課題を率直に語り合う中で、明日の展望を開くとともに、山梨県下のキリスト教の進展に寄与したいと思います。

(北 紀吉)



### 2009年度の組織会

連絡会代表 小島章弘  
連絡会委員 清藤城宏(書記)  
横山文彦、古屋秀樹(会計)  
北 紀吉(顧問)、鈴木信行

### 編集後記

☆第3回の例会は30名の出席者でした。会を重ねるごとに出席者が増えていることをうれしく思います。特に今回は高齢者問題をテーマに取り上げたことも皆さんの関心を一層ひいたことと思います。信田さんの思いに触発されて、一人住まいの方々が安心して支え合いしかも教会生活が続けられる、そんなキリスト者のグループホームが山梨の地に誕生したらどんなに素晴らしいことでしょう。「想いをかたちに」したいものである。(清藤記)



Tomosibi

灯

山梨県キリスト教連絡会

2009年10月設立 代表:小島章弘

事務所 ▶ 〒400-0024 甲府市北口3-4-23 日本基督教団 愛宕町教会内 Tel 055-253-3150

NEWS LETTER N0.3

## 奨励「親身になって」小林 恵 牧師 (南甲府教会) フィリピの信徒への手紙 2:19~30

今、日本では航空行政が問題になっている。飛行機には機長そして副操縦士がいる。副操縦士に注目すると、機長と共に操縦を担っている。機長に何かあれば代わってしなければならない重大な責任を負っている。飛行機のみならず私たちの人生においても副操縦士のような存在を必要としているのではないか。機長と副操縦士には上下関係があるが、私たちが必要としているのはお互いがお互いを励まし支えあう存在である。親、家族、友人あるいは職場の同僚、結婚する相手と、人生において様々である。聖書は「日々励まし合いなさい」と告げている。私たちの信仰生活・教会生活において、お互いに副操縦士だと思う。パートナーとしての存在。信仰のパートナーについて思いを深めたいと思う。

19節以降に2人のパートナーについて書いてある。テモテとエパフロディト。まずテモテだが、注目すべきはパウロとテモテの関係である。息子が父に仕えるようにと書かれている。しかしパウロは師匠でなく同等のパートナーと見ていた。パウロに仕えたのではなく「福音に、キリストに仕えていたパウロ」のパートナーです。お互いに心にかけて、支え合う関係として宣教の旅を続けた。パウロ同様どれほどフィリピ教会を心にかけていたか、「親身になって」本来真実に配慮するという意味があるように、その意味においてうわべだけではない、深いところに根差した両者の関係を見ることができる。この深い関係を、次にエパフロディトについて語りながら展開していると思う。

フィリピ教会はパウロの宣教活動を支えるまでになった。教会はエパフロディトに贈り物を持たせパウロのもとに派遣する。彼はパウロのもとでしばらく奉仕していたが病気になってしまう。パウロの配慮でフィリピ教会に帰ることになるが、気になるのはエパフロディトの病気である。瀕死の重傷、キリストの業に命をかけ死ぬほどの目に遭ったとある。自らの命、全存在をかけてパウロと共にキリストに仕えたのである。テモテ同様パウロの宣教活動を助け支える良きパートナーとなってくれたとして、彼

の病気を配慮しながらフィリピ教会に彼への思いを述べている。ポイントは27節、瀕死の病気にかかったが、神が憐れんでくださり彼だけでなく自分をも憐れんでくださり、悲しみを重ねずに済むようにしてくださった。両者の関係が単に人間的な関係ではなく、中心には主の憐れみがあったと実感をおこめて証しているように思う。



パウロとテモテ、パウロとエパフロディト、パウロとフィリピ教会、その係わりの中心にパウロが見つめていたもの、それは主イエス・キリストであった。お互いの熱心さや友情も大切だが、それがそれぞれの関係を築き上げていったのではなく、そこにキリストがおり、親身になって心にかけて、世話してくださるキリストを確信したからこそ、そのキリストを中心とした交わり、パートナーシップをフィリピ教会に深めていってもらいたいと願っていたと思う。その一心で二人をフィリピ教会に送り出そうとし、パウロ自身も再会を通してキリストにある交わりを願っていたのではないかな。

平和を願い平和志す私たちに求められているのは、人に対し物事に対し親身になって心を傾けていく志ではないか。真実と誠実さを持って出来得る限りの事を実行していこうとするこの世の命に対する根源的な係わりの問題であろうかと思う。その中心には主イエス・キリストがおられ、親身になって私たちを心にかけて、十字架の真実を持ってこの世に仕えてくださるキリストの憐れみがある。この憐れみをひたすら祈り求めながら、親身になって互いに仕えていくパートナーシップを大事にしていきたい。パートナーとは部分を共にする人、信仰におけるパートナー、それはキリストの御身体を形成している一人一人の係わりである。このパートナーシップを十二分に用いて伝道の業に励んできたい。



第3回例会 発題報告

高齢化問題の行くえ —これまでの経験を通して—  
信田悦子氏（デイサービス「やすらぎの家」代表、南甲府教会員）



この会の趣旨は大変結構だと実感しております。  
非常に極端な高齢化が日本に迫っている。どうしてこんなに健康で長生きするようになったのでしょうか？  
ここでわたしのプロフィールを先ず紹介します。

1. わたしのプロフィール

1927年白州町に生まれました。戦前戦中が子供時代でした。戦争に勝たねばならないという教育一本でわたしの青年時代まで届きまして、1946年終戦の一年あとに教師になりました。なんの教育目標も無く手探りの教育でした。必死に教師として立ち、どうしてよいか…それでも何とかかじりついて続けました。

しかし夫も県の職員でしたので、肩たたきに遭い29年間で教員生活を終えました。その後、身体障害者の教育にたずさわる囑託となりました。天井だけ見ている子どもたち。教育を受ける機会がない子どもたちがいるということを全く知りませんでした。この子たちも教育を受ける権利があるということで、初めてその子たちに私たちの手で勉強を教えるということがなされました。

2年勤め、家庭に入りました。時あたかも母は82歳でした。叔母のところに養女に入り、子どもの無い親の面倒を看ることになりました。父は62歳で亡くなり、母はそれから30年生き延び、98歳までわたしと共に元気で一緒におりました。

夫は母が亡くなった2年後に68歳で亡くなりました。本当に独居の寂しさ切なさになり出された思いでした。子どもたちはそれぞれ成長し、長男は甲府教会でCSに通いましたが、まだまだ祈りの内にあり、長女は甲府教会で養われ、クリスチャンホームをつくり生活しております。

2. 高齢化問題

この問題は一人一人の自覚が必要なんだと感じております。1988年、分区婦人部の研修会で穴戸好子先生を迎え、その時押し寄せてくる高齢問題について老いる姿勢を学び、老いることの厳しさについて中央教会、日下部教会、甲府教会の姉妹が発題し、そのことを聞き討議し研修をしました。それから中村先生、奥さまの勧めで老いの研究会「サラの会、老いを考える会」を立ち上げました。まだ自分たちに実感が無いものですから、学ぶということに専念しました。

高齢者の実態は、山梨県は日本中で最高の高齢者県、日本は世界で最高の高齢者国で、そういう中において核家族の生活が始まり、どんどん増えていきました。そして建築ブームでどんどん家が建ち、家庭は別れ、親子は別々に住む現状になりました。その付けが今、回ってきたのではないのでしょうか。

福祉の実態を知ろうと、老人の施設・ホームを手分けして見て回り、本当に幸せなのだろうか？ この施設で良いのだろうかと回りました。その前にも、勉強会では、自分が入りたい施設はどんなであろう、本当に入りたい施設はあるのだろうかと話合いました。なかなか良い施設だねというところもありましたが、どうしても私たちの目で見ると心が不十分で、やはりキリスト教的な施設をつくりたいね、という旨がございました。それで、県外のキリスト教の施設を見て回りました。見て、いいな、すばらしいと思いました。私たちの施設が欲しいという気持ちになり、考えました。

そのような時に、塩山の奥にある一町歩の土地を使っていたきたいという申し出がありました。今時そんなことが…と驚き、有り難いねと憧れ、飛びつきました。地権者を調べ、そして山を見に行きましたら、それは山の中で陰しく、老人ホームを建てるにはとても莫大なお金がかかる事がわかり、お返しした方が良くとのことで辞退しました。そういうことに敗れながらも、本当に夢を叶えるために熱を上げました。

そして、それも大事だけれど、各教会にいるお年寄りの方々にどんな手立てが出来るだろうかと、サラの会が教会に来られない方々のために、お茶の会をしました。「こんな風に、よその教会の方とお交わりが出来るとしても見なかった」と大いに喜んでいただきました。何回かお茶の会をしました。

他にも奉仕の場があるのではないかと、小笠原愛先

生が読み聞かせの奉仕をしていらしたので、私たちもそうした行動を通し、祈りと行動をタイアップしましょうということで仲間を募り、歌を歌ったり、読み聞かせをしたり、皆さんの話を聞いたり、青い鳥の活動をし、例会、活動、例会と、サラの会の活動を8年間続けました。

でもその頃、平成のはじめ、国がゴールドプランを打ち出しました。高齢化の速度が速く、新しいプランを立てなければ追いつかないというのが平成5年～10年の間でした。

一方、私たちは何とか信田の家を使えないかと考えておりました。そこに県の長寿社会課から「家を提供し開放してくれるなら、デイサービスを許可するとの厚生省のお達しがあったので乗るかね」とのお知らせがありました。私どもは公のものに乗らず、私たちだけでやってきたのですが、あまりにも光がなかったものですから、国のシステムを受けようではないかと、厚生省に行きました。菅厚生大臣の時で「県が認可すれば許可する、第一号を許可しますよ」とのことでした。それで国、県は良かったのですが、市の福祉担当には、駄目、時期尚早と追い返されました。けれども、市長に直接、サラの会のメンバーが交渉に行きました。市長は「それは良い」と許可。それを契機に立ち上げることができました。ですが「それは行政に加担してもらうことだから、信田さん一人でやったら。サラの会は手を引くから」と言われ、でもアンケートをとりましたら協力するという大勢の声があり、申請し、平成8年の7月やっと認可がおり、甲府市委託のデイサービスが始まりました。でも、やっぱり委託を受けるべきではなかったなあと……。それでも13年間行いました。

介護保険が出来、市の財源も厳しくなり、あなたたちのような小さなところには助成金をあげられないとまで言われました。私たちは、老後をできるだけ楽しく自分らしく生きたいと思う方を皆さん入れて欲しいと願っていたのですが…。市は助成金との絡みがあるものですから、ひと月に5日以内とか、来たくて何日とか、独居でなければだめ、ご夫婦はだめとか、入りたくても入れない条件が多々あり、このことでも市に交渉に行きました。福祉の中身は厳しいもので、そういうことを通して、自分の考えと行政の福祉は違うことをも知らされました。

お年寄りに有利にして差し上げたいと思い、昨年4月から市の補助をお断りし、単独で行っております。

援助がないことは、厳しいと思いますけれども、胸を張って「どうぞ」と言える「やすらぎの家」になりました。相変わらず小さな小さな「やすらぎの家」ですが、このように胸を張って「いらっしゃい」と言えるのはやはり良かったなと感じています。

この間、支えてくださった教会の方、御手伝いの方々

に本当に感謝です。このような輪は何物にも代えがたいです。そして読書会のグループ、踊り、音楽家の方など、ボランティアが訪問してくださり、和やかな場を作ってくさっております。それから、介護の実績を持っている方、看護師さんのボランティアが来てくださり、健康の管理、介護をしていただいたり、いろいろな方の交流のなかで支えられました。行政の絡みで十分な運営はできませんでしたが、それでも14年間続けられたことは本当に感謝です。

14年間に53名、初めからで94歳の方お二人もおります。内緒で来ていただくのではなく、おおっぴらにお受けできるので本当に良かった。独立して、行政の力を借りなくてやる事が望まし事と痛感しております。

これからはどういう事が高齢化問題に必要なと、その行くえを考えます。行政の絡みの中では、県下の教会の方、サラの会の方も入っていただきたかったのですが、甲府市の方だけしか入れないということがあり、市外の方は不可能でした。サラの会は、高齢化の学びの中でお互いに育ちをいたしましたものですから、今後私たちはマタイ5章にあるように、私たちは「地の塩でありたい」ということです。「世の光でありたい」となりますと、教会こそが、こういう形の発足が可能であろうかと祈りに覚えております。と申しますのは、愛宕町教会のように毎週日曜日に食事サービスをするなど、それぞれ手がつけられておりますし、教会の中の会員同士は、高齢者に対し最も声かけをしやすい一番良い単位ではないのでしょうか。その単位の中で、教会に来られない方に手を差し伸べ、何とか教会にお招きしたいと思うのが教会でして、やはり教会こそ高齢化問題に一番先に火を灯す大事な拠点ではないかなと祈りに覚えております。

今後の方向、実情、教会の実態の中で、高齢になってお世話になる時、入りやすい場所になるようにもっていかないと、とそういう責任を感じております。

サラの会の発展として、各教会のデイサービスを研究しあえたらと思います。

